



# NASHIM

## ヒバクシャ医療国際協力通信

### CONTENTS

- 大盛会!!ナシム初の東京シンポジウム
- 韓国医師等へ受入研修を実施
- 出前講座「放射線をサイエンスする」
- 第9回永井隆平和記念・長崎賞候補者の募集
- 小中学校等で行う出前講座の開催案内



▲セミバラチンスク核実験場について説明を行う山下俊一教授(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長)



チェルノブイリ

カザフスタン

● セミパラチンスク

● 日本

# 大盛会!!

## ナシム初の東京シンポジウム

テーマ

# 核に汚染された 大地を歩いて

—チェルノブイリ・カザフスタンが語り続けるもの—

日時：平成22年12月18日(土) 14:00～16:30

場所：東京都千代田区丸の内2-5-2 三菱ビル10階

参加者数：180名

講師：山下俊一（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長）  
：鎌田 實（日本チェルノブイリ連帯基金理事長）

司会：高村 昇（長崎大学教授）

主催：長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

共済：長崎大学グローバルCOEプログラム「放射線リスク制御国際戦略拠点」  
長崎大学国際連携研究戦略本部



## 開会あいさつ

本日は、ナシム東京シンポジウム「核に汚染された大地を歩いて」を開催いたしましたところ、お忙しい中、このように多くの皆さまにご出席いただき、心からお礼申し上げます。

長崎・ヒバクシャ医療国際協会略してナシムと称しておりますが、ナシムは、1992年、長崎県・長崎市及び長崎大学医学部をはじめ県内の放射線医療にかかわる医療機関等により設立され、以来、至上最悪の原発事故により被災したチェルノブイリの子供たち、また長期にわたる核実験のため被災したカザフスタンの人々を救済するために、被災地の医師の受け入れや長崎からの医師の派遣など、原爆被爆者医療で培われた最先端の医療を提供し続けています。



ナシム会長 蒔本 恭  
(長崎県医師会長)

ナシムは、同じ苦しみを受けた世界のヒバクシャに対し被爆地長崎だからこそできる支援を続けていくことが、ひいては核兵器廃絶と世界平和に大きく貢献することになると考えています。

今回、ナシムの活動の実績とその意義を多くの方々に知っていただくとともに、被爆地長崎が切実に願う核兵器廃絶と世界平和への思いをお伝えしたく、命を大切にするシンポジウムを開催することとなりました。

講師には、医師として地域医療に多大の貢献をされるとともに長年にわたってチェルノブイリ救援活動を行ってこられた、鎌田實（かまたみのる）先生をお招きしております。鎌田先生が理事長をされている日本チェルノブイリ連帯基金は、ナシムが被爆50周年に設定した「永井隆平和記念・長崎賞」の第5回受賞団体であります。後方にパネル展示もしておりますが、ここに皆さまにご紹介させていただきたいと思っております。

鎌田先生には大変ご多忙の中、快く講師を引き受けてくださり、この場をお借りしまして深く感謝申し上げます。

またもうお一人、チェルノブイリ医療協力20年、カザフスタンのセミパラチンスク地域医療支援15年と世界に向けて長崎から医療支援を続けてこられ、またナシム活動のリーダーでもある山下俊一教授から、ナシムの活動について皆さまにご紹介させていただきたいと思っております。

皆さまには、今日のシンポジウムを機会に日本チェルノブイリ連帯基金とナシムが日本から世界に向けて発信している世界平和へのメッセージに対し、力強いご支援をいただければ幸いです。

終わりに、ご出席の皆様のご健勝とご多幸を心から祈念いたしまして、ご挨拶といたします。



# 講演 1

## 「長崎からの国際ヒバクシャ医療協力」

講師

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

科長 山下俊一



### 1 チェルノブイリ原発事故

事故直後の除染作業者及び強制退去者における平均被ばく線量、セシウム137の放射能汚染土壤地図を説明しながら、現地での医療活動を紹介

#### 短半減期放射性ヨウ素類の大気移動推定 - 原発事故直後 -



図1

#### 放射性Cs137放射能汚染土壤地図



・放射線被ばくを例に外部被ばくと内部体内汚染による健康影響  
・環境健康リスクにおける確率的影響と確定的影響(閾値)

図2

#### 旧ソ連崩壊に伴う医学教育の混乱に対するナシムからの支援

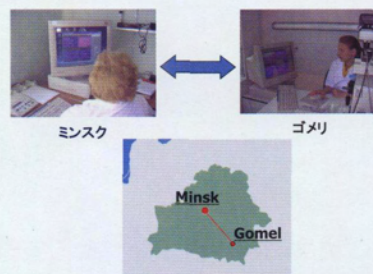
現地のベラルーシ医科大学やゴメリ医科大学にロシア語に翻訳した医学書を提供、また診断治療基準づくりや、ヒバクシャに生涯続く健康リスク管理を教育指導するとともに、長崎大学が行っている遠隔医療、顕微鏡下での診断支援などを紹介

#### ソ連崩壊に伴う医学教育の混乱



図3

#### 遠隔医療;顕微鏡下での診断支援



Cytological images are regularly consulted from Gomel to Minsk.  
Currently three cases per week are consulted through this system

図4



## 2 セミパラチンスク核実験場

セミパラチンスクでは500回近い地上、大気圏、地下核実験が繰り返された。

この核実験により被ばくした周辺住民を救済するため、JICA地域医療改善プロジェクトとも連携をとりながらこれまでナシムが行ってきたカザフスタンのセミパラチンスク地域医療支援について紹介

### セミパラチンスクでは500回近い地上、大気圏、地下核実験を繰り返す



図5



図6

長崎大学は、後継者の育成を支援するため、セミパラチンスク医科大学の正式優秀な学生に対し、「長崎国際医学賞」を授与している。

この賞の受賞者をはじめとする若い世代は、両大学さらには両国の架け橋になることが期待されている。



図7

### アルマ・アタ宣言について紹介

1978年9月、旧ソ連のカザフ共和国首都アルマ・アタに、世界140カ国以上の代表がWHOとユニセフの呼びかけで集まり、国際会議が開催された。

この会議で「西暦2000年までにすべての人に健康を」という目標を定め、その為の世界戦略として、プライマリー・ヘルス・ケア（PHC）と言う理念を打ち出した。

その10箇条の最後の条項に；

現在かなりの部分が軍備と軍事紛争に使われている世界の資源を、十分にかつより良く利用すれば、世界中のすべての人々の健康水準は西暦2000年までに十分達成可能となろう。独立、平和、緊張緩和、軍縮への真の政策は、平和的目的、とくに社会経済開発の促進のために適切に活用されるさらなる資源を生み出すことができるであろうし、また、そうすべきである。その中で、PHCは、必要不可欠な要素として、資源が適切に割り当てられるべきである。



## 放射線被ばく医療ネットワークの構築

今後は原子力潜水艦、放射性廃棄物処理などの核解体作業が問題となってくる。  
先端医療機関の国境を越えた連携や医学の人材育成がますます重要となってくる。



図8



図9

## 3 ナシムが今まで行ってきた事業の紹介

### ① 海外人材育成のとりくみ

- ・チェルノブイリ・セミパラチンスクなどの世界の放射線汚染地域でヒバクシャ医療に従事する人材を育成するための事業（研修生の受け入れ、専門医師の派遣、医学教科書の出版）

### ② 国内後継者育成の推進

- ・ヒバクシャ医療を通じての国際貢献と平和希求の精神を継承する後継者を育成するための事業を実施（講演会の開催、事業紹介パネル展の開催、啓蒙図書の作成、永井隆平和記念・長崎賞の授与）

### ③ ヒバクシャ医療情報の受発信

- ・国際ヒバクシャ医療情報の収集・発信と緊急被ばく医療に対応できるようなホームページの充実

## まとめ

国際医療協力活動は平和活動そのものである



図10



図11



図12



## 講演2

### 「生きているってすばらしい」 ーチェルノブイリ救援活動20年の報告ー

講師

日本チェルノブイリ連帯基金

理事長 鎌田 實



鎌田先生がこれまでチェルノブイリで行ってこられた救援活動の数々を美しい映像と音楽を交えながら、丁寧に報告していただきました。

- ・パレスチナの旅で、心臓移植を受けた少女とその少女に心臓を提供したイスラエルの少年の父親に出会った。少女は、自分も命を助ける医師になりたいと夢を語り、少年の父親は子供の臓器が今も生きていることはうれしいが、うれしさは半分、まだ完全な平和は訪れていないと語ったこと。
- ・難民キャンプで予防接種を受けているスライド
- ・両親を殺された少年が寂しく食事をしているスライド
- ・眼のがんにかかった少女、この子は病気になって入院したときに初めて、院内学級で勉強することができ、すばらしい絵を残して亡くなった。その絵はチェルノブイリ連帯基金が募金活動の一環として行っているバレンタインチョコの缶を飾る絵に選ばれた。このことを知ったとき、この子は「自分はもう助からないけど、私の絵で誰かが助かるから嬉しい」という言葉を残した。
- ・20年前、ゴメリ州立病院で、白血病のお母さんから「うちの子供を日本に連れて行って助けて」と頼まれたことがある。その時、タチャーナ先生は「ひとりの子供を助けても問題は解決しない。私たちベラルーシの医師を教育してほしい。私たちに薬を支援してほしい。私たち医師が自分の国の子供を助けることができるようになることが大事」と言った。
- ・タチャーナ医師は自らもがんと闘いながら、最後まで子供たちの治療に全力で取りんだ。
- ・その国の大人がその国の子供達を救うのが原則、そのためにどのような支援ができるのが大事。
- ・永井隆先生もすばらしい医師だったと思うが、ベラルーシにも永井先生のような自己を犠牲にしても住民のために医療活動を行う医師がいる。
- ・9.11テロ以後、憎しみの連鎖があるように感じるが、今世界で必要なのは温かさの連鎖だ。
- ・平和・自由を考える人はどこにでもいる。軍隊強化ではなく、心と心を繋げそこら中に温かい種を播くことが必要だ。



## 質疑応答及びご意見

Q 原子力発電所の事故が起こった場合、どのようなことに気を付けたら良いか？

A 原子力発電所の事故はヒューマンエラーで起こる可能性が高い。これを防止するためには、①高度な教育、しっかりとした科学の心を持つこと、②情報をオープンにすること、が大切。世界中で唯一原爆を落とされた広島・長崎がすべきことは基準をつくることである。

Q これからの鎌田先生の方向性は？

A 今までも行き当たりばったりで、系統だっけはいなかった。チェルノブイリ支援も理路整然とあつたわけではなく、誰もやらないなら自分が支援をやってもよいのではないか思い活動をはじめ、そうすることでチェルノブイリ原発事故を風化させないことができるのではないかとと思う。

Q 山下先生の話の小中学生にもしたらどうか？

A 現在ナシムでは、小中学校への出前講座を行い、放射線への理解を深めてもらっている。

Q セミパラチンスクではどのようなことをしているのか？

A セミパラチンスクでは疫学調査を行っている。2万人のサンプリングを行い、ガンの発生が通常の1.7倍という結果が出ている。

まだまだ質問のための挙手は多数ありましたが、時間の都合により途中で打ち切らせていただきましたこととお詫び申し上げますとともに、最後までのご静聴ほんとうにありがとうございました。

## 閉会あいさつ

本日は、年末のお忙しいところ、ナシム東京シンポジウム「核に汚染された大地を歩いて」にご参加いただきまして、ありがとうございました。

山下先生のチェルノブイリ・カザフスタンでの医療活動について、現地で活動を行ってきた山下先生ならではのお話を聞くことができましたが、これらは過去のことではなく、現在も放射線で苦しんでおられ、治療を必要とする方々がたくさんいらっしゃることを改めて認識いたしました。これからも長崎大学をはじめ、ナシムの構成機関と共にチェルノブイリ・カザフスタンへの支援を継続したいと考えております。

また、鎌田先生のお話では、自分の子供の心臓を提供した父親と心臓移植を受けた少女との話しがとても印象的でした。

「戦争」という悲しい行動をおこす人間が、その一方で敵味方であるにもかかわらず、生きるために心臓移植を行う。憎しみばかりではなく、人への温かさが伝わるお話しでした。

鎌田先生が理事長を務められておられるチェルノブイリ連帯基金の活動に負けないように、これからナシムも世界に広がる活動を行いたいと考えておりますので、皆様のご支援・ご協力をいただきますよう、お願いいたします。



長崎大学 副学長  
大井久美子



# アンケートの感想

- イスラエルの心臓移植を受けた少女の話。心臓移植を決断したパレスチナの父親の勇気ある行為に感動した。
- 日本でも世界でも困っている人がたくさんいるが、私には何ができるだろうと改めて考えた。できることを1つ1つやるだけかなと思ったが、まずは動かなければならないと感じた。
- 気持ちを込めた具体的な活動を通して他者を良くしていく山下先生や鎌田先生の想いはすばらしいと思います。
- 負(憎しみ、戦争、報復)の連鎖ではなく、正(優しさ、温かさ)の連鎖の話が聞けて良かった。
- 日本にできる貢献ということについて考えさせられた。
- 山下先生の話は知識(理論的学術的な放射線の人体への影響)としてためになる講演で、鎌田先生の話は心を大切にする(気持ちに訴える)内容で何度も涙が出そうになりました。
- 放射能についての正しい知識の普及は難しい。
- 地道ながら創造的な活動に感動しました。「愛」にあふれていることが人を繋げていくこと、それが平和に繋がることを学びました。
- ナシムや日本チェルノブイリ連帯基金の活動が世界に広がる活動になってほしい。
- 小さな力の積み重ねと継続が大切だと改めて感じました。
- 長崎が最後の被爆地になるよう、核兵器廃絶に向けた長崎の活動、取り組みに期待しています。
- ナシムと鎌田先生の現場主義の活動がいかにも重要か理解できた。
- 過去のことになったと思っていたチェルノブイリ原発事故やセミパラチンスク核実験場などで長い時間をかけて活動していることを知って、平和(世界状況)に関心を持つ使命あることを強く感じた。
- 今後の自分の生き方を考える良い機会になった。
- 援助の方法、支援の方法についてとても考えさせられました。
- 世界の核汚染の実情について大変良く理解できた。また今後の汚染の危険性と問題点を知ることができた。
- 人は他人と共生するものである(人と人との絆)ということに改めて気づいた。
- ナシムの成り立ちを今回の講演会を通して初めて知りました。長崎と東京の距離を感じましたが、チェルノブイリ、セミパラチンスク、イラク、ネバダと繋がることで理解を深める機会になりました。
- 温かい心の支援を心がければ世界は良くなると確信しました。
- 物を送るのではなく、現地の人たちが自分の手で人を助けられるようにするという支援の方法が素晴らしいと思った。

多数のご意見ありがとうございました。





①丸ノ内風景



②会 場



③受 付



④開会挨拶・蔦本会長



⑤山下教授講演



⑥会場風景 1



⑦会場風景 2



⑧司会・高村教授



⑨会場風景 3



⑩会場風景 4





⑪鎌田理事長講演



⑫鎌田理事長講演



⑬会場風景5



⑭質疑応答



⑮質疑応答



⑯質疑応答



⑰質疑応答



⑱質疑応答



⑲閉会挨拶・大井副学長



## 受入研修事業 (11月)

# 韓国医師等へ 受入研修を実施



ナシム蒔本会長を表敬

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる5名の関係者を招いて、受入研修を実施しました。研修者は11月14日に来崎し、事務職2名は11月18日まで、医療職3名は11月20日まで長崎に滞在して、長崎原爆病院をはじめとする医療機関や長崎大学などの研究機関等で被爆者医療に関する知識の習得や情報交換を行うとともに、原爆資料館などを訪れ被爆の実相についても学びました。

## 研修後の感想

### ソウル赤十字病院 内科医 丁 恩皓(チョン ウンホ)

去年、ソウル赤十字病院で大津留先生(長崎大学病院)の講義を聴きました。また、時折、病院で原爆被爆者に会ったりしていたので、原爆の被害や被爆者の治療について浅いながら、ある程度の知識は持っているつもりでした。しかし、今回長崎での研修を通じて私の浅い知識をはるかに超えるたくさんのごことを得ることができました。そして、原爆被爆者の治療・研究のために一生懸命に働いていらっしゃる方々の姿を見ながら、いろんなことを感じ、勉強になりました。これから歩いていく医者としての人生の中で、かなり大きな影響力を与えてくれるだろうと思う今回の研修を準備して下さった方々に、心より感謝申し上げます。

短いといえば短く、長いといえば長かった一週間でしたが、長崎の美しさを感じるには十分な時間だったと思います。こんなに美しい港町に、あんなに苦しい原爆の痛みがあったというのは、実に皮肉的だと思います。将来、機会があったら子どもたちと一緒に来たいと思う長崎です。ありがとうございました。



### 居昌赤十字病院 内科医 李 宗錫(イ ジョンソク)

研修期間の間、いつも親切にしてくださり、ありがとうございました。直接被爆者の診療を行っているのではありませんが、健康診断など間接的に診療をしていますので、非常に役に立つと思います。

長崎で行っている継続的な研究が今後、起きるかもしれない放射線関連事故及び医療にとっても役立つと思います。

もう、高齢になった被爆者の方々(日本、韓国など)に対してより細かな心づかいや思いやりが必要だと思います。苦しみの中にいらっしゃる被爆者のために、医療関係者、行政職員など、みんながもつと頑張るべきだと思います。





東 義 医 療 院

内科医 李 峻浩(イ ジュンホ)

全般的に新しい経験ができてとてもよかったです。

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の見学などは漠然としていた被爆者の被害状況を直接に感じたことで、関連業務の大切さについて考えることができました。

最後の日、熊谷先生（長崎大学病院）の講義はとても現実的な問題を扱っていたので印象に残ります。特に「グループワーク」で提示してくださった実際と類似したケースは今後の臨床診療に大変役に立つだろうと思います。中島先生（長崎大学医学部）の講義も私の専攻と関係がある分野の話で興味深かったです。

特にセミナー室にある巨大なモニターから見る病理組織の所見の鮮明さは忘れられないと思います。



大韓赤十字社特殊福祉事業所 総務担当 呉 明恵(オ ミョンヘ)

今まで原爆関連の仕事をしてきて、習得していたのは仕事に関連した内容だけの生畧りの知識でしたが、ここに来てたくさんのお話を学ぶことができました。

長崎大学病院、原爆病院、医師会、健康管理センター、恵の丘原爆ホームを次々と訪れ、被爆者に対する政府(日本)の支援状況や研究、そしてこれからの生活についてまではっきり分かり、心から深く感じ、考えることができました。

いろいろたくさんのお話を学んだ研修でした。戦争のむごたらしさや原爆のこと、特に現在、大韓赤十字社でしている原爆支援についてより真剣に考える機会になりました。いい研修を通じてたくさんのお話を聞きさせていただきました。真にありがとうございます。



大韓赤十字社特殊福祉事業所 支援担当 崔 小娘(チェ ソナン)

研修が始まる前、長崎に落ちた原子爆弾、その一発の意味をはっきり理解していませんでした。今回の研修で、すべての被爆者のことを思いながら、何十年が経った今も被爆者の体や心のために頑張っている方々に感謝の言葉を伝えたいです。

原爆死没者追悼祈念館の原爆死没者の名前が記載されている名簿保管所の前で、黙祷しながら心から哀悼の意を捧げました。私たちは今それぞれ違う人生を歩んでいますけど、一瞬に廃墟になった都市で、原爆死没者から学び、感じています。

どうか核兵器のない永遠に平和な世界になりますように…。

4泊5日の研修ですべてを理解したとは思いません。

原爆投下の中心地である長崎市を訪問する足取りが軽やかではなかったですが、私にとってはとても有意義な、忘れられない研修でした。

これからもより多くの方がこの研修を通じて、恵の丘でお会いした被爆者の方がおっしゃったように、改めて言いますと、世界平和のため二度とこんなむごたらしいことがないことを祈りながら、関心と愛情を持って原爆被爆者の気持ちを理解したいと思います。



長崎大学病院河野院長を表敬

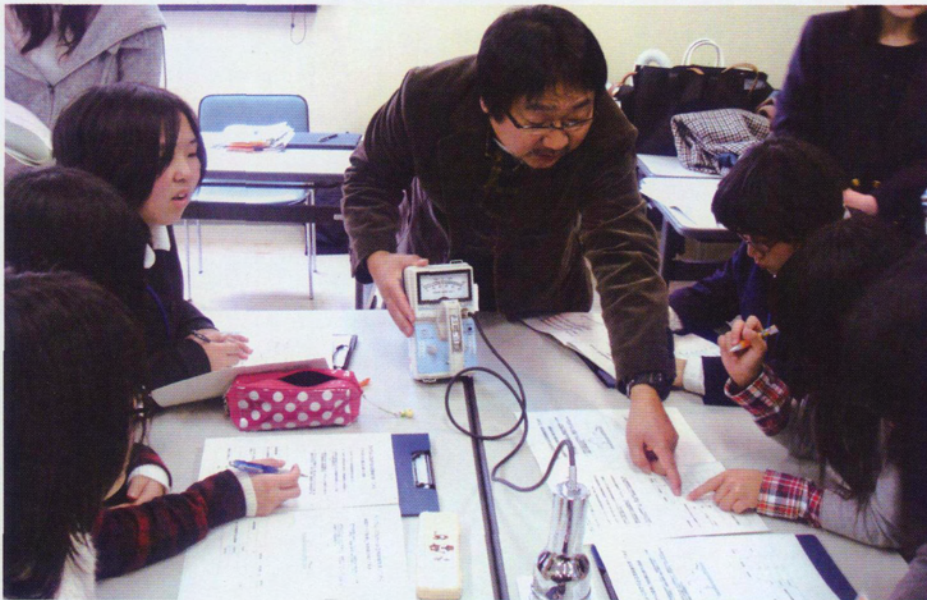


恵の丘原爆ホームを訪問



## 出前講座

# 放射線をサイエンスする —正しく知ろう放射線—



青少年ピースボランティアに説明する松田教授

NASHIMでは、ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、「平成の鳴滝塾～ナガサキでしか受けられない放射線の授業～」と題して、長崎大学の先生方に小中学校等へ出向いていただいて講義を行う出前講座を実施しています。



今年度8回目となる出前講座を平成23年1月15日（土）、長崎大学先導生命科学研究支援センターアイソトープ実験施設で長崎市の青少年ピースボランティア（主に高校生）38名を対象に行いました。普段は小中学校へ出向いて講義だけですが、今回は講師である松田尚樹教授のご配慮により、教授が所属するアイソトープ実験施設での講義と実習となりました。

講義の内容は「放射線をサイエンスする—正しく知ろう放射線—」というテーマで、「放射線とは音や携帯電話の電波と同じように空気中を伝わるエネルギーで、見えない、聞こえない、臭わない、感じないもの」と説明し、放射線測定器を用い講義室の空間や準備してきた塩化カリウム粉末を計り、普段生活する環境だけでなく人体に存在する元素からも放射線を検出できることを実証しました。

また、講義の後半は松田教授から「昔の地球には放射線はなかった?」、「日本には放射能を持った温泉がある?」などの放射線に関するクイズが7問出されました。さすがに高校生だけあって、全問正解者も数名出ました。

実習では、放射線測定器（アルファちゃん、ベータちゃん、GMサーベイメータ）を使用して、空気中のほこりから出ている放射線量を測定したり、霧箱を使用して放射線が飛んだ跡を検出しました。





## 生徒の感想

- ・今まで放射線＝髪の毛が抜ける、がんになる可能性があるという風に考えていましたが、放射線はどこにでもあるもので、普段自分達が生活している身近な所にあるものだということがわかりました。そして、必ずしも放射能を浴びたから病気などになるというわけではなく、一定の量を越すと髪の毛が抜けたりするということがわかりました。
- ・放射線は原爆で人々を苦しめるだけでなく、私たちの生活に大いに役立っていると分かりました。放射線のおかげで、電気が通って、放射線のおかげでガンが見つかって・・・私たちの多くは放射線は単に怖いものだと思っていますが、そうではないことを知りました。
- ・「ホールボディカウンター」を見てみて、全国的にも珍しいこのような機械が長崎にあるのが本当に驚きました。
- ・放射線を測る実験でプラスチック板と鉛板では遮へい後の放射線量が違い、鉛板の方が値が低くなりました。また、ラジウム-226 をGMサーベイメータから遠ざけると値が低くなりました。部屋の空気のコリ（注1）から放射線を測る実験では、アルファ線、ベータ線、ガンマ線のすべてが出てびっくりしました。また、霧箱の実験（注2）では飛行機雲のような筋が見えて、すごいと思いました。

（注1）ホコリには室内中のラドン、トリウムおよびその娘核種が吸着しています。

（注2）粒子線（主にアルファ線）の飛跡が一筋の霧のように見えます。これは、飛んできた粒子により過飽和の状態の気体が刺激され、液滴が形成したためです。飛行機が飛んだ跡に飛行機雲ができる原理と、基本的に同じです。



クイズを行う松田教授



放射線測定器  
(GMサーベイメータ)



放射線測定器の測定方法を  
指導する職員



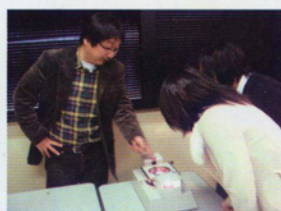
放射線測定器の使用方法を  
説明する吉田正博 助教



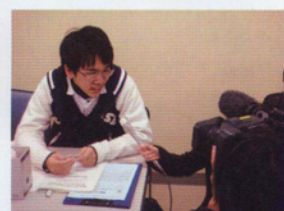
放射線測定器の測定方法を  
指導する職員



真剣な表情で実習を行う  
青少年ピースボランティア



霧箱で放射線の飛んだ跡を検出



マスコミから取材を受ける  
青少年ピースボランティア



## 第9回永井隆平和記念・長崎賞候補者を募集



NASHIMでは、長崎原子爆弾被爆50周年にあたる平成7年に、原子爆弾により重傷を負いながら被爆者の救護に挺身した永井隆博士の功績を称え、「永井隆平和記念・長崎賞」を創設しています。

この賞は永井博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぐ国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を隔年で顕彰するものですが、平成23年度は第9回目を実施予定です。

本賞の候補者としてふさわしい方をぜひご推薦ください。詳細については随時ホームページ(<http://www.nashim.org/>)でお知らせします。

## 小中学校等で出前講座を開催します

ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、長崎大学の先生方に小中学校等へ出向いていただき講義を行う出前出張講座を実施しています。平和と科学・医療に関する国際協力への興味・関心を促すことのできる楽しい講座です。



下記の幅広いメニューを小中学生等の皆さんにわかりやすく説明しますので、興味をお持ちでしたらぜひ事務局までご連絡ください。

1	放射線って何？ - 身近な放射線の話	
2	チェルノブイリにおける国際被ばく者医療協力	原子力発電所事故による被ばく者への国際医療協力 ベラルーシ人から見たチェルノブイリと長崎 テレメディスンによる遠隔医療協力
3	カザフスタンにおける国際被ばく者医療協力	核実験による被ばく者へ国際医療協力
4	世界の被ばく事故と国際被ばく者医療協力	世界のヒバクシャ：世界での被ばく事故について もし、被ばく事故が起こったら 放射線障害を治療する最新医療（再生・移植医療について）
5	長崎原爆の話	原爆直後の救護活動と調査 長崎原爆被爆者のこころの調査
6	在南米・在韩国被爆者	海を渡った被爆者
7	核時代における世界の動向と長崎の将来	
8	放射線・紫外線とわたしたちの健康	